

おしゃべりマテリアル

みよん！

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

### 【山口探偵事務所】

その事務所は探偵事務所の名を掲げた、町の便利屋さん。

ある日、鍵の失せ物探しの依頼を受けていたときに現われた小さな女の子。

スズと名乗るその少女は「鍵の場所なら知ってるよ？」と、笑みを浮かべながらそう

言った――

日々依頼と共に奔走する青年、啓二と

不思議な力を持つ女の子、スズの物語。

# 目次

大きなのつぼの古時計と小さな不思議な	
女の子	1
小さな街の街灯と迷子の女の子	35



# 大きなのつぼの古時計と小さな不思議な女の子

応接室に戻ると、その中はいつの間にか静かになっていった。

先ほどまでの音の発生源は、と思いい机にコーヒーカップを置くと、応接用のソファに横になって、すうすうと寝息を立てる少女が約一名。

スリッパは無造作に脱ぎ置かれていて、足はソファから外に出ている。まさに座った状態から横になったのが丸わかりな姿勢。

机の上にあつた羊羹は丁寧に全部——俺の分も含めて——無くなつていて、口元には羊羹の欠片が付いていた。

ソファに汚れを付けられたらかなわんとティッシュで口元を吹いてやると、「うう、ん……」と寝言を漏らす。起きたか、と思いきや、声はそこで止まつて、またすうすうと可愛らしい寝息が聞こえ始めた。

「本当……なんなんだろうな、この子は……」

小学校一年生、スズと名乗つた少女。今は、子どもらしくぐつすりと眠っている女の子。

今日の依頼は、この子がいなければ解決に相当な時間がかかっていただろう。

見た目上はどこにでもいる、白い花の髪留めを付けた女の子。けれど——  
「う、うう、ん」

スズは小さく身じろぎをしたかと思うと、再び寝息を立て始める。

その寝顔はどこか満足げで、口元は三日月型を描いていた。

「分かんないな、本当……」

啓二は、そう呟いて左手に付けたヴィンテージものの腕時計に触れる。

部屋の中は、安らかな寝息が聞こえるだけだった。



『山口探偵事務所』

駅から徒歩八分。アーケードがある商店街を通り抜けた先に、その事務所兼自宅がある。

今は休日の午前十時。人で溢れているわけでもないが、閑古鳥が鳴いているわけでもない、適度な賑わい具合をみせるアーケードの中を啓二はゆつくりと歩いていった。

『第一、第三日曜日は蚤の市』と書かれた看板の横を通り過ぎると、急に通路が狭くなった。ちようどこの日は露店が開かれる日のようで、普段は通路となっているアー

ケードの両側を利用して、雑貨屋や食品の移動販売車等が出店を構えていた。

特に用件も無いと足を止めずに歩き続けていたところで、青いビニールシートの上に陶器を並べている露店が啓二の視界に入った。

大きい壺や皿、湯呑みのようなものが所狭しと並んでいるが、雑然としてお世辞にも綺麗なレイアウトとは言えない。店主は呼び込みをすることもなく座っているだけで——というよりも寝ているようにも見える——なかなか売る気は無いように見えた。

これが道楽商売というものか、と思いながら通り過ぎようとし、

「……………む？」

ふと足が止まった。

ただの陶器売りなら、特に目を引くこともないはずだった。

しかしそのブルーシートの前で商品をまじまじと見ている人物がいることに気づいたのが一度目。その人物が、小学校に入っただろうかほどの少女だったことが二度目。そして茶碗を持って、にこにこ笑みを浮かべているのに気づいたのが三度目。

思わず視線だけで何度もそちらを見やっってしまうほど、その光景は異様なものだった。思わず瞬きをし、目を擦って再度その場所を見ても、その光景は変わらなかった。

近くに祖父でもいるのなら話は分かる。少女が、おじいちゃんが何かを買ってくれる

のを期待して付いてきたのだろうと。しかしその場にいたのは少女ひとり。保護者らしき姿はどこにもなかった。

出店の前に座っている少女、頭には白い花があしらわれたヘアピンを付け、一本に結った髪は首筋を隠すほどの長さがあった。青を基調としたワンピースは、サイズが若干大きいように見える。しゃがんだ姿勢でもスカートの裾が脛近くまでであった。

器を両手で大事そうに持ち、顔に近づけてにこにことしている表情。少女が自発的にそこにしゃがみ込んでいるのだと思った時には、啓二の足は止まり、視線はその不思議な子に釘付けになっていた。

「あはははっ」

ふと聞こえてくる明るい声。目の前にいる少女が発した声ということに気づくまで、少しの時間が掛かった。

まるで同年代の友人と談笑するときのような、小学校のグラウンドで元気に駆け回っているときのような、そんな嬉しい、楽しい、そんな感情が伝わってくるような声。屈託の無い笑みを浮かべて、少女は笑い声を上げていた。

どこか笑うポイントでもあるのだろうかと思えるけれど、それは至って普通のガラのお猪口。小学生ほどの少女が面白がるような絵柄ではないように思える。

感覚が独特の子だろうか——少女はうんうんと頷きながら、にこにことした笑みを絶



やさないままそこにしゃがみ込んでいた。

「……………」

ひとしきり頷きながらその器との対面をしている最中、ゆつくりとその顔がこちらを向くのが見えた。くりくりとした目で、不思議なものを見るような表情がそこにある。

「……………おじさん、どうしたの?」

ふわふわとした声でそう言つて、首を右に傾げてから「あ、お客さんかな。ずれるね」としゃがんだままカニ歩きで横にずれる。

そして別の器を持ち上げ、器との対面を再開した。彼女はここの店主の娘かもしれない、との考えも浮かんでくるが、聞いてみないことには分ならず、疑問は深まるばかり。

「……………」

再度振り返つた彼女と目が合う。今度も視線が自分にあることに気づいたのか、眉が寄つて怪訝な顔になる。

ふと少女がポケットの中に手を入れるのが見え、一瞬で背中冷や汗が伝つた。

——今の子は防犯ブザーを持っているから、安易に話しかけると碌なことがないぞ。

同業者の言葉を思いだす。

人通りがそれほどしかない商店街とはいえ、けたたましい通報音を鳴らされればたまつたものではない。

「……いい、いやつ、なんでもない！」

何か行動を起こされる前に場を離れるが吉、と判断した啓二は、そそくさとその場を離れる。背後からはブザー音が聞こえることはなく、振り返ると少女は器との対面に戻っていた。

ほつと胸をなで下ろし、先ほどと同じ足取りで事務所へと足を向ける。

「え、そうなの？　そうは見えないけどなあ」

商店街の喧噪の中、ふわふわとした声が、啓二の耳に入った気がした。



『山口探偵事務所』と掲げられた看板のある一軒家。事務所スペースに入ってノートパソコンを立ち上げると、メールが一通届いていた。

『依頼について』とタイトルがあったそのメールは、「町内会の祭りで使用するポスターのデザインをお願いします」と書いてあった。「詳細は別添を確認ください」とテキストファイルが添付されていたので、締め切り日を確認し、本文と合わせて出力だけしておく。

従業員一名で経営しているこの探偵事務所は、開業して5年ほどになる。『探偵』と掲

げている事務所にも関わらず、依頼される内容は探偵業に関係するものだけではない。——むしろ圧倒的に本業の方が少ない。開業したての頃に依頼される内容を片っ端からこなしてきたという過去もあつてか、今日となつては『地域の何でも屋』としてのポジションを確立しているような節さえ有る。

昨今の依頼内容と言えば、ポスターやビラのデザイン、内職のような何か、蜂の巣駆除に引越しの手伝い、それに失せ物探し、等々。掲げている看板の割に多岐に渡つてゐる。

一般の人がイメージするような、張り込みや事件解決などは一度もしたことは無い。殺人事件の場に居合わせたことは無いし、探し人は猫か犬が大多数。

今日の予定に何も無いことをスマホのカレンダーで確認をし、さて一仕事始める前にコーヒーでも、と台所に向かおうとしたその時。

「山口屋さん！　お願いがあるの！」

カランカランとドアベルが鳴り、それと同時に女性の声が飛び込んできた。

『山口屋さん』と呼ぶということは、おそらく便利屋扱いをする商店街の中の人だろう。身長は160センチほど、服装は普段着にほぼ近く、自宅からまつすぐにここにきたことが覗える。見覚えこそは無いが、比較的若い部類に入る年齢の女性に見えた。

この店まで急いできたのだろう、肩で息をし、たどたどしく言葉を伝えようとしてく

る。その意思是ひしひしと伝わってはくるが、内容を把握するまでには至らなかった。「依頼のお話でしょうか。でしたらこちらへ」

よそ向けの努めて落ち着いた対応を見せて、応接用のソファアールへと案内する。コップを二つ準備し、冷蔵庫から取り出したアイスコーヒーを入れる。焦って何かを言つて、後になって話に食い違いが出てくるのはよろしくない。落ち着いてもらおう、まずはそこからだ。

アイスコーヒーを一口飲んで、大きく息をついて。もう一口飲んで、ハンカチで額をぬぐう。女性はようやくよく息も整つてきたように見えた。

「——それで、お願い、とは？」

「そうなのー！」

持ち上げていたコップを机に叩きつけ、事務所内に大きな音が響く。

ソファアールに背を預けていた姿勢から前屈みになり、顔が一気に近くなる。その目は大きく開き、今にも食われそうな気さえした。

お客さん曰く。今日起きたら寝室の貴重品を入れていた引き出しの鍵が無くなっていった。鍵は普段は大きな古ぼけた時計の中に入れていたはずなのに、今日見かけたら無かった。空き巣に入られた形跡も無いし、鍵の場所を知っている人物はいるはずが無い。中には大事なものが入っている。毎日見ないと気が済まない。鍵が開かないのな

らこじ開けてでもいいから中を確認したい、と。

ソファアールから腰を上げて一息でしゃべりきった彼女は、また息を大きく吸う。

失せ物、鍵。以前時計の中。今朝紛失。と手元のメモ帖に書き残す。

「なるほど……ううん。ではいくつか質問させてください」

失せ物探しの依頼。そして鍵。よくあるパターンだと思いつながら、顔と口には出さないようにする。事件性は無し、ただし依頼人に難有り。

手のひらを見せてソファアールに座るように合図を送り、相手が腰を落ち着かせるのを見てから聞き取りに入る。

「大きな古ぼけた時計というと、どのくらい？」

「時計の扉の裏に……明治、5年、って書いてあったかしら。木製のふっるいやつよ」

「いいえ、すみません。鍵を入れ始めてから、です」

「ああそつちね。二月くらいかしら」

「ふむふむ、ありがとうございます」

二月ほど使用、とメモに記入。

女性足が細かく揺れているのを見るに、相当焦っているようにも、いらだっているようにも見えた。

これまでの行動から、どちらかと言えば女性は几帳面でないように思える。とすれば

考えられるのは鍵の紛失。どこかに落としたか、置き忘れた可能性が一番高い。

——ここは直接現場を見せてもらった方がいいか。

「それではその部屋を見せていただいても？」

「もちろん」

失せ物探し、特に鍵探しの依頼は少なくない。

考えられる全ての場所を探し、数日経つても解決できない場合は、最終手段として鍵屋に依頼して、鍵を開けた後に合鍵を作ってもらう方法もある。仕事柄、簡単な鍵なら開けられるようになった——なってしまうた、と言うべきか——けれど、流石に本職には敵わない。

「準備をしますので十分ほどお待ちください」

「ええ、待ってるわ」

ソファーから腰を上げて、事務所の二階へ通じる階段を上る。

「大きな古ぼけた時計の中にあつた鍵の、紛失。昨日から今朝にかけて、か」

依頼内容を復唱するように呟いていると、ふと啓二の頭の中にメロディが浮かんできた。

——大きなのっぽの古時計。おじいさんの時計。

子どもの頃、音楽の時間に歌ったことがあるそれは、少し前に有名なアーティストが

歌ったことで再び脚光を浴びた。

おじいさんのことを知っていることかのように歌っているその曲。幼少期の啓二は、どうにもその曲の歌詞に納得がいかなかった。時計が、おじいさんのことを知るわけが無いだろう。よしんば知っていたとして、誰がそれを聞いたのだ、と。物は物、人は人だと。ませた子どもだった頃の啓二は、そう思っていた。

「そもそも。物が知っているなら、失せ物の在処でも、教えてもらいたい、ねっ、っ」とクローゼットから工具箱を取り出す。依頼の度に出番があるこれは、今では大分使い込まれた様子が見て取れるようになった。

——まさか、これを使っているのが『探偵事務所』の人間だなんて、普通は誰も思わないだろうに。

頭の中で自嘲しながら工具箱を持って階段を降りると、女性は腕を組んで床を鳴らしていた。

「準備できました？ 行くわよ？」

「承知しました」

「ち」と「し」の間のくらいには女性はおもむろに立ち上がり、「た」を言うのと同時にドアベルが甲高い音を鳴らした。

せつかちだということ、そして言葉に気をつける必要がありそうだと考えつつ、啓二

はその後を追った。



通されたのは、事務所から歩いて数分の距離にある呉服店。途中で例の白い花の髪飾り少女がいた陶器屋の前を通ったが、彼女は相変わらずそこにいた。

『千代田呉服店』と文字が大きく描かれたショーウィンドウの中には、艶やかな服を着たマネキンが数体佇んでいる。

『臨時休業』の張り紙が付いているドアを開け、店中から居住スペースへ。廊下をまっすぐ通って一番奥の部屋の扉を開ける。「ここよ」と言われて通された部屋の中に、一際存在感を放つ存在があった。

大通りに面していない部屋ということもあり、商店街のざわめきはほとんど聞こえてこない。その分——こち、こち、と大きな時計が奏でる軽い音が、部屋に満ちていた。

「あれ、ですか」

「——ええ。時計の扉を開けたところに、鍵があるの。……あつたはずなの」

一度後ろを見て、それから幾分声を落として話しかける。誰もいないことを確認したからの言葉とすれば、よほど用心深い相手だということになる。そうだとすれば、口頭



での情報流出は無いはずだが……。

「ここ最近、この部屋に誰かが入ったことは？」

「ゼロよ」

「……はあ」

「ゼロよゼロ。一人も入れたことが無いわ。鍵の隠し場所だつて知ってる人がいるはずがないの！ でもないの！ ねえどういふことだか分かる？」

そう言つて、女性は啓二の肩を揺さぶってくる。

冷静に考えなければいけないときに感情的になるのは勘弁してもらいたい、と言葉には出さず、極めて冷静にその手を払う。

「……ごほん、では時計の中を探させてもらつてもいいですか？ それで無ければ、まず室内を探して、それでもなかつた場合、一度こちらで鍵を開けます。それで合鍵を作る方法が適切かと」

「その業者、信用できるんでしょうね？」

「商店街の中にある、長年続く老舗です。信用はできると思います」

「そ、ならまずはもう一度探してみましょ」

鍵が開かないという事態は避けられると分かつたのか、女性は目に見えて落ち着いて見えた。まずは依頼主を安心させるのが大事。解決策を考えるのはその次だ。

時計の中、無し。

時計付近の床、無し。

女性のかばんの中、無し。

部屋の中の床、二人がかりで探しても無し。

他に思い当たる場所を聞くも、無し。

残るは、彼女がどこかに持って行って忘れた可能性だけだが……。

「まず応急処置として、鍵を一度開けて、中身を確認してからそれから探すという方法もあります……いかがでしょうか？ 最初の依頼としては、中身を確認したい、とのことでしたし」

「そうですね。まずは中身を確認して、それから鍵を探すのもいいわね」

女性の焦りの表情が、少しだけ和らいだように見えた。よほど大事な物が入っているのだろう、まずは安心させてやる方が先だろうと啓二は考えた。

「それでは、失礼して」

啓二は、工具箱から、ライトと細かい作業ができる道具を取り出し、鍵穴をライトで照らして、おや、と声を上げた。

「……………ん。あれ、この鍵、少し特殊ですね」

「そうなの？」

「この鍵、そこらで見えるものより太くありません？　この机も年季入ってますから、ここに ある道具だとちよつと無理そうですね」

「できないの？」

依頼人の言葉にいらだちの色が再び表われた気がした。その先を聞け、と言う言葉は胸の中に押しとどめて、にこやかに笑いかける。

「いえ、できますよ。ただ事務所に道具を取りに行かないといけなないので取ってきますね」

女性の承諾を得、啓二は一度店から出ることに。

決して二人だけの空間が息苦しかったわけではない。決して一息付きたかったわけではない。そう、道具を取りに行くだけなのだ——という体で依頼人と共に部屋を出た。啓二が先、依頼人は後。

背後から、かちり、と部屋の鍵がかけられる音が聞こえた。

店の入り口から外に出ると、商店街のざわめきが急に耳に入ってくる。依頼人の寝室がいかにかたかただったかが分かる。

物品を取りに事務所へ戻ろうと一歩踏み出し——ふと、啓二は呉服店のショーウィンドウの前に人がいることに気づいた。

ただ通りがかりに見ると見るといふレベルではなく、その人物は両手と額をびったりとガラスにくっつけて、文字通りかじりつくように、中にあるものを見ていた。

その女の子の背丈は、学校に通つていればランドセルを背負いはじめたかと思えるくらい。ガラスの向こうのマネキンが着ているような着物を纏うのは、おそらくまだまだ先のことだろう。けれど少女は横顔で見ても分かるくらいに、目をきらきらと輝かせている。

微笑ましいなあと思ひながら視線を事務所の方へ移そうとして——啓二は頭のどこかに引つかかる物を感じた。

頭の白い花が付いたかんざしに、後ろで結つた髪に、青いワンピース。

白い花が風に揺れるのを、どこかで——

特徴的なかんざしを凝視しながら考えていると、ふと少女の顔が啓二の方へと向く。くりくりした目が、大きく見開かれた。

「あれ？ さつっきのおじさんじゃない」

「……………ああ。…………おじさんじゃなくてお兄さんと呼んで欲しいな。おにーさん」

おじさん、という呼ばれ方で、女の子が先ほどの陶器に夢中だった子だと思いだす。

よく見ると、不思議そうに首を傾げる仕草は先ほどと同じだった。

「おじさん、こんなところで何してるの？ あいびきう？」

そして、少なくともその年では決して使わないであろう言葉を投げつけて来た。ドラマか何かの影響だろうか、最近の子どもは言葉が達者で仕方が無い。

「逢引きって……」

さてこの子の質問には返さなければならぬ。逢引きなどと言いつらされてはたまらない。

——しかし仕事と言うのは簡単だが、子どもに話すような内容でもないし、内容が内容だ、わざわざこの少女に言う必要はどこにも無かった。

「あー、えつとだなあ……」

未だに下方向からの視線を感じつつ、なんと返そうかと悩んでいた矢先。

ふと、少女は先ほど出てきた店のドアの方を不思議そうにのぞき込み、また首を傾げたかと思うと、

「まあおじさんが言うのはおいといて。ねーねーおねーさん」

啓二に興味を無くしたと言うかのように、今度は依頼主の方へ歩み寄る。

きらきらとした目はそのままに走り寄るのを見、依頼人が少ししたじろぐのが見えた。

——子どもが苦手なのだろうか

「ねー、おねーさん。このお店の中に、ふるーい、年季が入った物って何かあったりする？」

一度見かけた人物にはおじさんと呼び、一方で依頼人に対してはお姉さんと呼ぶあたり、どうも最近の子どもはどこかませてるように思える。ここでおばさんと呼んだ時には——手を上げるかは分からないが、少なくとも機嫌を損ねるだろう。

「え、ええ、あるわよ。大きな時計」

「……時計。うん、やつぱり」

少女の勢いに気圧されたのか、素直に答えると、何か得心したようにうんうんと頷いたあと、ずんずんと近づいてきて再び啓二の裾を引っ張った。

「ねーねーおにーさん、お店の中、連れてって?」

おじさんと呼んでいたのが、急におにーさん呼ばわりになる。お願いする時はご機嫌を取るつもりなのだろうか。

遊んで、とも聞こえるその言葉に、眉が寄るのを感じる。今は仕事であり、隣にいるのは依頼人で、しかも解決の道がまだ見えていない。そんな状況なのに、そんなことをしている暇はない。

上目遣いでお願ひされたところで、それはできないお願ひで。

「お嬢ちゃん。お兄さんたちはお仕事してるの。分かる? 邪魔されちゃ困——」

「鍵の場所、知ってるんだってー」

少女の一言に、啓二と依頼人の二人はぴたりと動きを止めた。そしてぎこちない挙動

で、お互いの顔を見合わせる。

間違つても、不特定多数がいる場所で鍵の話なんてしていない。それなのに、なぜこの少女は鍵を探している等と知っているのか。

しかも、場所を知ってる、と。伝聞口調で言うというのは、一体――。

「――なに、を？」

「だからね、おねーさんの鍵の場所、分かるかもしれないんだってー」

誰の、までを言い当てる。口から出任せにしては、当たり前すぎている。

臨時休業と張り紙がある店の中には、今は誰もいないはず。けれど少女は、誰かに聞いたような口ぶりで、無邪気に声を上げる。

両手を体の後ろで組んで、少しだけ胸を反らして。「お願い」と「できるよね」と二つの意思を込めて、見上げる。依頼人は啓二の方を見つめていた。こくりと頷いたのを見て、小さくため息を付いてからゆっくりと口を開いた。

「……………こつちだ」

「ありがとー、おにーさん」

依頼主がくるりと振り返って、足を向けて歩き出す。

お願いの表情をしていた少女は、にこーつと表情を緩ませた。



「おい……ええと……」

「スズ、だよ」

振り向いてにへら、と笑みを浮かべて自分の名らしきものを名乗る。「すずしろ、つて言いくいから、スズでいいよー」と続けて、その言われに得心がいった。

なんと呼ぼうかと言葉にできないうちに、あちらの方からそれに応えてきた。表情を読むのが得意なのだろうかと思うと、その笑みが更に深くなった。

「他人の家だ。むやみやたらに触るんじゃないぞ。何度も言うが——」

「遊びじゃないんでしょ？ 分かってる分かってる。けーじさん？」

こちらから名乗る前に、名前と同じ発音をされて思わず足が止まる。警察かと勘違いしているのならそれはそれで、と思っっていると。るるんと歌い出しそうな足取りで、「探偵さんなのに、けーじさんっ」と歌うように続ける。

「……………」

一度も会ったこともないのに、名前と職業を言い当て、近所からの言われまでもを言い当てられた。ここの商店街の子だろうか、いや、このくらいの年の子は、少なくともこの商店街に住んではいけないはずなのに——



腰の後ろの方で手を組みながら、少女——スズ——は頭の白い花びらをひらひらと揺らしながら依頼人の後ろを付いていく。

「わあ……！」

寝室に入り、ぐるりと中を見回したスズは歓声を上げる。真新しいものなどは無く、至つて普通の寝室のように見えたが、スズにとつては何か感銘を受けるところがあつたのだろうか。うきうきしている、という気持ちが前面に出ているような、そんな表情をし。

——そして、寝室の中を駆けだした。ベッドの近くにあるランプに触れ、電気を付け、消し。古時計の元へ行つては愛おしそうに撫で、その向かいの化粧台に向かつては一番下の引き出しを開け——ようとして鍵がかかつていて開けられなかった——ようとした。数分前の『分かつてる』などどの口が言ったのだろうか。思わずため息が出た。

物色、と言うと聞こえは悪いが、寝室の中を駆け回る少女を見て、依頼主は何も思わないのだろうかと隣を見ると、ペットの粗相を見るような、そんな優しい目をしている。こんな表情もできるのだ、と頭の片隅で考える。

探検が済んだのだろう、依頼主の元へ帰つてきたスズは、頬をつやつやとさせていかにも『満足した』と言わんばかりの表情を浮かべていた。

「……この部屋。部屋も物も、とても大事にされてるんですねっ」

「え？ ええ、まあ……」

依頼人もスズのペースに巻き込まれているのか、啓二に見せた勢いは鳴りを潜めてい

る。もう一度ゆっくりと部屋の中を見回したスズは、大きな時計に視点を定めながら、依頼主の裾をついついと引つ張って自分に注意を向けさせた。

「ねーねーお姉さん。探してる鍵の形と、分かりやすいものがあれば教えて？ あと最後にそれに触ったのはいつごろ？」

注意を引くときに裾を引く動作をするのは癖なのだろうか。年相応らしく、可愛らしいとは思うのだが、今は仕事なのだ、集中集中。

スズに問われたことに対して、依頼人は膝を折ってスズと目線の高さを合わせる。

「銀色の鍵で、全体的に角張って——かくかくしてて、このくらいの大きさをしているわ。小さな鈴が付いていて、最後に触ったのは昨日。これでいいかしら？」

「ふんふん、なるほどなるほどお……」

依頼人が両方の人差し指で鍵の大きさを説明すると、スズも同じように顔の前でその大きさを作り、「こんなくらい？」「そのくらい」と認識が合ったことが分かると、にまーと笑みを作った。それから納得したように首を前後に何回も振る。鍵の場所を知っているなどと言っていたようだが、この少女はそんなことを聞いてどうするのか。

「じゃあねえ……」

スズの視線の先にある大きな時計。スズには鍵の隠し場所という情報は教えていないはずだが、視線はずつとその時計に向いていた。

とことごと時計の前に歩いて行つたスズは、昼に陶器屋で見かけたときのような笑みを浮かべて――

「こんにちわっ!」

手を後ろで組んで、小さく首を傾げて。スズは、その時計に向かってそう話しかけた。「あー、あのな、お兄さんは遊びに来たわけで」「ちよつとしずかにしてて」

釘を刺そうとした声に、ふわふわした――それでもどこか真剣味を帯びた――声が重なる。

「ねえ、角張つた形をした、鈴がついた銀色の鍵つてどこにいったか分かる? 昨日お姉さんが使つたらしいんだけどー」

スズは話を続ける。端から見ると一人遊びをしている子どものようなでほほえましい光景ではあるのだが、こちらは仕事で来ているのだ。そういつた遊びは、昼に会つたときのようにひとりのときにしてもらいたいものだ。

「なによあの子。私幽霊とかそういうの信じないんだけど」

「僕だって知りませんよ。入りたい、鍵のこと知ってる人がいる、つて言つてましたけ

ど」

隣からこつそりと話しかけられ、大きな声で反論しかけたのを、スズの声を思いだしてトーンを下げる。

スズと名乗る少女が行っていることは、ただの子どもの遊びのようには見えなかった。

——そう、思っていたのだが。

「ふむふむ、あなたのところから鍵を取り出して、机の引き出しに刺して、中から小さなものを出してなにやらにやにやにやしてた。鍵を閉めて、そのまま化粧台の方に歩いて行って、化粧を始めて、部屋をばたばたと出て行った。あー、なるほどねえ。それで鍵は？

ああ、化粧台の上に置いたんだ。え、じゃあそこに？ 違う？ ご主人さまが出てく時に？ あー、なるほどお」

スズは両腕を組んで、うんうんとしたり顔で頷いて見せる。ご主人さま、鍵、化粧、その日。啓二が事情聴取をするときのようなやりとりを、たつたひとりで行っていて。

「うんっ、ありがとね！ たぶん分かった！」

スズはくるりと振り返る。口角が上がり、目をきらきらとさせ、目に見えてご機嫌なように軽い足取りで、逆側にある化粧台の前へとととと歩いていく。

化粧台の椅子を引いたと思うと、手を使ってそれに乗り、化粧台の引き出しをがらり

と開ける。引き出しの中を凝視するようにじいつと見ていたかと思うと、椅子から飛び降りて再び椅子を数cmずらして、また飛び乗る。

引き出しを出し切れなかったのだろうか。依頼主に言えばやってもらえただろうに、と思いつながら、スズは先ほどと同じように引き出しを引っ張って——

「あつ」

スズの声が聞こえたと思つたその瞬間、がしやんと部屋に音が響き渡つた。

「……………」

「……………」

かち、こち、と時計が時を刻む音だけが部屋に響く。

スズも、依頼主も、もちろん啓二自身も、声を出すことができない。おそろおそろ隣に立っている人物を見ると、依頼主の表彰が固まっていた。

はつと我に返つたスズは椅子から飛び降りて、引き出し——だったもの——の中をのぞき込む。かと思うと、引き出しの中に手を入れて、何かを取り出した。

依頼主の方へと走り寄つたスズは、依頼人を見上げながら、握つた手を開く。

「探しているモノは、これ？」

その手のひらには、銀色の物が光っていた。



「本当に、本当にありがとうございまして！」

依頼主は、ペコペコと何度も頭を下げる。

啓二そのものに対してなのか、はたまたその隣で満足げに微笑むスズに向けてなのか、それは分からない。

「いえいえ、見つかつてよかったですね」

まったく人騒がせな、との言葉は胸の中にだけ留めておいて、営業スマイルでやり過ぎます。

そして、その隣にいる小さな立役者は、と言うと。

「ありがとねー。おかげでお姉さんの鍵見つかったよー」

まるで離れたところにいる友人に話しかけるように、手を上げた。

「え？ お姉さんはそそっかしいから心配だ？ そーなんだ。……はあ、化粧を落とさないまま寝ちゃうことが多くって風邪引かないか冷や冷やする。化粧も濃くなってきた？ おじいさんもなかなか大変だねえ」

そして誰かとの会話を再開する。けたけたと笑いながら話すスズは、視線の先に話し相手がいるかのように、頷き、返し、そして笑う。

依頼人は、最初はぼつが悪そうに頭を掻いていたが、その表情はだんだんと硬化していった。

「……そうなんですか？」

「……………、なんで知ってんのよ」

試しに、聞いてみた。

たつぷりと時間をかけて、依頼人は苦い物をかみしめたときのような表情で、それだけを呟いた。

「なあ」

「はーい?」

先ほど探検を終えたあとと同じくらい、つやつやとした表情をして店を出たスズに、思わず話しかけていた。

振り返って見上げるその顔には、好奇心が満ちているように見えた。

「ちよつと話がある。事務所へ来てもらえるか？」

「あー、人気の無いところへ連れ込んでどうするの？」

人差し指を頬に当て、思わせぶりの顔をして体をくねらせるのを見、周りに誰もいないことを啓二は幸運に思った。端から見ると、明らかに怪しいやりとりでしかない。

「応接室は外から見えるようになってる」

「なら中で甘いお菓子、ちよーだい」

両手の手のひらをみせて、にっこりと笑う。

調子がいい奴だと思いいながらも、啓二はその条件を飲むしか無かった。

「あつちで見せた物は……何だったんだ?」

「むぐ、んっ……もぐもぐ、え?」

差し出された羊羹に大きな口でかじりつき、頬張った姿はさしずめハムスターのよう  
でほほえましさを感じる。たつぷり時間をかけて咀嚼して、ごつくんと音を立てて飲み  
込んだあと、首を右に傾げる。

「え? じゃなくて。その……どうやって鍵を見つけたか、だが」

「そりゃあ……もぐもぐ、ん。聞いたのよ?」

もう半分の羊羹を大きく開けた口に放り込み、もぐもぐごつくんともう一度繰り返し  
「それがどうかしたの?」とでも言わんばかりに首を今度は左に傾げる。

「聞いたって、誰に?」

「時計のおじいさん」

「……………え?」



一瞬、何を言われたのか分からなかった。誰に聞いたって？ 時計？

「時計って、何の？」

「お部屋にあった、あの大きな時計よ？」

「部屋にあった時計がどうしたって？」

「だからー、その時計のおじいさんに聞いたの。鍵の場所を」

それで答えは十分でしょ？とでも言いたげに、スズは羊羹をもう一切れ口に運ぶ。

「あの時計が、……しゃべったとでも——」

「ん」

——言うのか、と言う前に、スズは目を瞑って縦に首を振った。

困惑する啓二を尻目に、スズは口の中の羊羹を飲み込み、もうひとつの羊羹へと手を伸ばす。口の中に入れようと口近くまで運んで、視線に気づいたのかそこで手は止まる。

「おにーさんたちが出てきたときにね、お店の奥から『鍵の場所なら知つとるぞお』って声が聞こえてきたの。だからおにーさんに話して、中に入れてもらったの」

スズが言うのは店で会ったときのことだろう。その時点で、聞こえていたとスズは言う。

「そして、お部屋の中に入ったら、その声が時計のおじいさんだつて分かったの。時計の

おじいさんに、昨日、姉さんがどんなことをしていたか教えてもらったの。そしたらけしよーだいに鍵をもつてつちやつたつて言うじやない？ もしかしたらその引き出しの中にあるんじゃないのかなーつて思つて、引き出しの中を見たら。……落としちゃつてけどね。きらつて光る物があつて。それかなあつて取つて見たんだけど、大正解！」腕を組んで、したり顔でうんうんと頷くポーズは、どこか大人びていて、けれど子どもが背伸びをしているようにしか見えなくて。

「時計に、教えてもらった」

「ずず……ふはあ。そうだよー。お姉さんの家にあつた大きな時計さんとか、今日見かけたおちよこさんとか、しゃべるひとはいつぱいいるよ？ あたし、そのひととお話するのが好きなんだー」

にこやかに話す様子には、当たり前のことを話すときのように、一切のよどみを感じられない。

このくらいいふ年では、嘘をつくときには明らかにうろたえたり、言葉が途切れ途切れになったりと何らかの兆候があるはず。けれどスズにはその兆候は無い。

話を聞く限りでは、眉唾ものでしかないが。しかし、今日の呉服店の中の様子では、確かに――

「……………物が、話すことが、……………ある？」

「私が話しかけたら、嬉しそうに返事してくれるし、お話してくれるよ?」

まさか、そんなことが。いや、でも今日の依頼は確かに――

考え事をしている間に、啓二の前にあつた自分の分の羊羹は、いつの間にかこつぜん  
と無くなっていた。



「ありがとー、おかしもおいしかったー!」

お腹をさすりさすり満足げに言うスズは、夕日に照らされてその頬がやけに明るい色に見えた。あれからスズがソファで寝ていたのはほんの数十分ほどで、起きたと思えば次の来客用にと準備していた煎餅やらに再び手を着け始めた。「ダメだ」と言っても「おかし食べさせてくれるって約束でしょ? げんちはとってるよ?」などとませた言い方をされ、結局は押し負けて「好きなだけ食べるといい」と言わされたのだが、それはまた別の話。

――その日。事務所にあつた羊羹が一本まるごと無くなった。

スズは羊羹や煎餅など、渋い趣味のものを食べていった。その一方で、クッキーのよ  
うな洋菓子はどうも苦手なようで、手を付けなかった。

駅の方まで帰るといふので、啓二は一応着いていくと持ちかけた。

もしかしたらスズのことを何か分かるかも知れないと思つた、ただそれだけのこと。

スズは後ろで手を組んで、ゆらゆらと体を揺らしながら気分良さそうに歩く。そして

その足は、今朝居た場所——陶磁器の前で止まつた。

露店の方へと手を振つてから、「おにーさん、やつぱりいい人だつたよ。ありがとね」と笑顔で言う。店主に言つてゐるようにも見えるし、その前に並んでゐるブルーシートに言つてゐるようにも見える。今朝であれば間違いなく前者だと思ふのだけれど——今はどっちに向けて言つてゐるのかは、判断が付かなかつた。

出店の陶器屋は何回か見かけたことはあつたにせよ、店主などと話をしたことなど無いはずだ。まして名前や職業などは言つたことが無い。

「店主から聞いたのか? ……その、俺の名前とか、」

「んーん、おちよこさんから聞いたの」

「……おちよこさん?」

「ほら、おじさんの目の前にある」

おじさん、は店主を指しているのだらう。その前、スズが指さしたものは——陶器で出来ている、所謂日本酒を飲むための——

お猪口。……さん?」

午前中に見た光景が脳裏に過ぎる。

聞いたと、彼女は言った。

お猪口を手に取って、彼女は頷き、笑っていた。

まさか、あの時計だけでなく、こんな小さな陶器とまで？

「えへー。おにーさんのことは、いろいろ、教えてもらってたよつ」

こちらの表情を読んだのか、イタズラっぽく、にへーと笑う。いろいろ、との言葉に、含みがあるような気がした。

「街灯さんに、看板さんに、マネキンさんに、……えつと、あと、たくさん！」

指折り数えて、彼女は笑う。

風が吹いた。

一本に結った髪の毛と髪留めの白い花がふわりと揺れる。

「ね。あそこのお店でお仕事してる。やまぐち、けーじさん？」

——大きなのつぼの古時計。おじいさんの時計。

——嬉しいことも悲しいことも、みな知ってる時計さ。

ふと、有名なアーティストが歌っていた童謡を思いだした。

時計が知っているなんて、比喩でしかない。  
啓二は子どもの頃からずっと、そう思っていた。

## 小さな街の街灯と迷子の女の子

カランカラン。パタン。

来客を知らせるドアノブの後にドアが締まる音がした。けれどこの店——山口探偵事務所の作業用の机からは誰の姿も見えない。

ぱたぱた。とすん。

何やら小さな人物が店の中を歩くような足音が聞こえたような気がしたが、作業机からはやはり何も見えない。

起こった出来事だけを列挙すれば、妖か何かの超常現象かと思われるそれ。しかしこの店の店主、山口啓二にはその理由も原因も分かっていた。

「ねーねー、ケーじさん。おやつはないの？」

何かがソファの上に座る音が聞こえたかと思うと、遠慮もへつたくれもないような幼い声が啓二の耳に入ってくる。依頼人との応対に使うためのソファの背は、そこまで高くない。けれど啓二から見えるのは、ぴよこんと飛び出たアホ毛と古めかしいかんざしの一部だけ。

「またお前は勝手に事務所に入ってきて……。来客対応中だったらどうするんだ。変な

目で見られるだろうが」

「今は暇そうじゃない？　ねーおやつはー？」

「来客用の茶菓子は来客にしか出さねえの。お前は来客じゃないから茶菓子は無し。オーケー？」

「オーケーじゃない」

立ち上がるとやつと見える、来客応用のソファに座って、ぱたぱたと足をせわしなく動かす少女が一人。

——一週間ほど前のこと。鍵を無くしたとの理由で来店した客の案件を、同じ部屋にある古時計から鍵の場所を『聞いて』解決させたこの少女——スズは、それからというもの、この事務所に定期的に入り浸るようになっていた。しかも来る度におやつをねだるおまけ付き。

今の時刻はもう午後4時を回っていた。確かにおやつには丁度いい時間帯ではあるが———と思ったところで、啓二はため息と共に応対スペースの方へと向かう。

コイツはここをおやつがもらえる場所だとも思っているのだろうか。口から出かける言葉をなんとか理性で押さえつけ、スズが座っている逆側のソファへと腰を下ろす。

「大体——お前、ここ最近入り浸ってるけどよ、他にいく場所はないのか？　毎日来ても



面白いことないだろ？」

「んー？　そうでもないよ？」

そう言つては再び持て余したように足をぱたぱたと動かすスズ。

「お菓子もらえるし」

——やっぱりか。今度こそ襟首を引つつかんで事務所から追い出そう。そう啓二は思い立って——もし一週間前のような失せ物依頼があつたときには役に立つかも知れない。いるだけであれば無害だし、直接的に仕事の邪魔をするわけでもないし——。そう思うと、実行にまでは移そうにも移せない啓二だった。

「………つたく、しょうがねえな……。今日だけだぞ」

「わあい！　けーじさん優しいから大好き！」

商店街の中で大声で言われようものなら警察通報待たなした台詞を口にして、にぱつとした笑顔を向けるスズに、啓二はため息を付きながら席を立つのだった。



クッキーを皿に載せて出したところ、「喉渇いたー。麦茶ちよーだい？」などと言うものだから二度事務所とキッチンとを往復する羽目になった。

「で？」

「むぐむぐ。……ん？　でって？」

「だから、今日は何の用で来たんだって話。お前も学校とかで暇じゃないだろ？」

「暇だよ？　だから来たの」

麦茶を音を立てて飲み込んだ後、あっけらかんとそんなことを言うスズに、啓二は頭が痛くなるのを感じていた。

「ここは学童保育所でも暇つぶしをする場所でもなくて、れっきとした事務所なんだが——そう口にしようとした瞬間、スズが口を開く。

「そういえば」

「あのな——ん、なんだ？」

「さっきから女の子の人がばたばたって行ったり来たりしてるけど——何かあったのかな？」

スズは「私はさっきから気づいてましたよ」とでも言うかのように、自慢げにそう口にする。

確かに、赤色の目立つコートを羽織った人物が店の前を何度か通るのを、啓二は目にしてきた。ただ店を訪れる訳でもなく、小走りに移動している様子だったのでそこまで気にはしていなかった。ただ、不思議には思っていた。

それはまるで——何かを探している様子だったから。

何かを察したのか、にいい、とスズの口元が三日月型になる。捜し物の案件を解決した直後というものもあるのだろう、何やら得意げで自慢げな笑みになっていた。

「声、かけてみたら？　ここは困った人のためにあるんでしょ？」

そう、挑戦的な声で言うのだった。



左右を見ながら、ぱたぱたと小走りでやってくるその人に啓二が声をかけると、その人物は事務所の扉の前で言葉をマシンガンのように投げかけてきた。その内容を要約すると——

「迷子……ですか」

「そうなんです！　ちよつと手を離れた隙にいなくなっちゃって……」

若い女性だった。おそらく20代。スズの母親がいますればこのくらいの年齢だろうと思われる、この商店街の住人ではない彼女。話をしているときも視線は不安げに左右に動き、我が子を探しているようだった。

「なるほどなるほど……私と同じくらいで、髪は長くて、空色のワンピース、……と」

「……って何でお前出てきてんだよ。事務所の中で待つてろ」

いつの間に出てきたのか、うんうんと頷きながらスズは啓二の後ろで思案げな表情を浮かべる。右手は顎の下に添えられていて、いかにも「私はちゃんと話を聞いて、考えますよ」と言いたげだった。

「女の子がいなくなったのはいつごろですか？」

「えっと……大体30分くらい前、かしら」

啓二の後ろからひよっこりと顔を出したスズは、女性へと問いかける。女性も女性で相当テンパっているらしく、啓二が聞いているのと同じように返事をしてきた。

後ろ手でスズの頭を押しやった啓二は、こつそりと後ろを向いてスズへだけ聞こえる声で叱る。

「おい邪魔すんな。……すいません、コイツのことは無視していいので」

「あー！ そーやってけーじさんは邪魔者扱いするー！ 私も聞く権利はあるでしょー？！」

『『権利』とか小学一年が使っているいい言葉じゃねえよ』

ぶうぶうと文句を垂れるスズだが、その目はどこか自信に満ちあふれていた。それはまるで、これは自分の得意分野だと言わんばかりの表情で。

「分かんないなら、聞けばいいんだよー！」

「この人だつて聞いても出てこないから俺が……つて、聞く？」  
「そう、聞く！」

両方の手を腰に当てて、胸を反らすスズは、今日一番の自慢げな表情を浮かべていた。

「あの……彼女は一体何を……？」

「いや、俺もよくは分かんないんですけどね……」

目の前で行われている行為に、困惑げな声を上げる女性へと、啓二は曖昧な答えを返す。

スズは「私に任せて！」と女性の前に出てきてはつきりと言ったかと思うと、得意満面といった表情で「商店街を見守っているのは、何個かある監視カメラだけじゃないんだよ？」そう、言い切った。

そして、事務所が建つ商店街のメイン通りに沿って立ち並ぶ、電灯の一つに手を添えたかと思うと、スズは静かに目を瞑って動きを止めた。

端から見ると、手のひらの表面で電灯の温度を確かめているかのようにも見えるその光景。自信満々に言った時とは打って変わって、静かなものだった。

「ああ……こんなことをしてる場合じゃないのに……。もう警察に行つた方がいいのかしら……？」

「まあもう少しだけ、待ってみましようよ」

全く身じろぎもしなくなつたスズにじれつたくなつたのか、焦つたように女性が独り言を呟き始める。それを啓二は八割の期待と二割の不安を込めた声で、女性を宥めた。

電灯自体は、この商店街が立つ前から立っていた——と啓二は聞いている——古いもので、何度も立て替えの案が出ては予算不足により延期を繰り返してきたものだ。

スズは何も言わず、手のひらをべつたりと電灯に付けて、押し黙っている。そのポーズのまま何分か経ち——女性が痺れを切らして警察へと足を向けようとした瞬間、目を見開いて

「分かつた！」

そう、口にしたのだった。



スズが口にしたのは、アーケードのメイン通りから一本外れた所にある、お茶屋さんの名前だった。

三人がその店に行くと、果たしてそこにいたのは女性が探していた子どもだった。

店の扉を開けるなり、女性は店内の椅子に座っていた女の子のところへ駆け寄り、女

の子も「おかーさん！」と口にして両手を広げた女性の元へと抱きついてきた。

「うんうん、これにて一件落着、かな？」

店に入った所に立ち、胸の前で腕を組み、スズは満足そうに頷く。

「お前……もしかして……」

その後ろからおそるおそると言つた様子で声をかける啓二に、スズは大仰に頷いて、そして言う。

「うん、電灯さんに『聞いて』みたの。で、電灯さんたちの中で女の子を見た人いますか？　って聞いてみたら、ずばりだった。女の子がお茶屋さんの中に入っていったのを見たって話を聞いて、来てみたらーってところ」

「やつぱりか。……前みたいに直接声で聞かなくてもやれるんじゃないやねえか。てつきり人の往来がある中で物に話しかける変な女の子が出現するかと」

「あー、あれはね。ちゃんと私は話を聞いてますよ？　ってけーじさんにも知ってもらいたくて……」

「余計な心配かけさせやがって……」

スズの頭をぐりぐりと不器用に撫でる啓二。スズは気持ちよさそうに目を細め、目の前で繰り広げられる親子の様子を眺めていた。

店の店主に話を聞くと、なんでも——お茶屋の店主も、女の子を警察に連れて行く間近だったそうだ。

ここの商店街自体は古く、どこか田舎のような空気がある。迷子の泣いている女の子を見つけて、声をかけたはいいものの泣いてばかりで話も聞けない状態だったから、お菓子とお茶で泣き止むのを待っていた——とのことだった。

何度も何度もペこペこ頭を下げる女性に、その女性としっかりと手を繋ぐ女の子。正式な依頼でなかったにせよ、困った人を助けることができ、啓二はどこかほつと安堵した気持ちだった。

案件を解決した時の、依頼主のほつとした表情。それ見るのがこの仕事を続ける理由であり、目的である啓二は、どんな形であれ——それが例え一銭の得にならなかったとしても——見ることができて満足だった。

——お人好し。

そんな啓二の事をそう呼ぶ人も居るかも知れない。けれど啓二はそれでいいと思っている。そうでもなければ——今の事務所が『何でも屋』扱いされてはいないのだから。

「あー、人の役に立つって楽しいね！　ね、けーじさん！　ねー！」

お茶屋から出て、二人並んで事務所へと戻る道すがら。両手を組んで空へと伸ばし、



「んーっ」と泣き声にも似た声を上げたスズは、満足げにそう呼びかける。にへら、と笑った笑みの裏に、啓二はスズの物言わぬ要望を察して。

「……分かった、菓子でも出そう」

「わあい！ 言わなくても伝わるってすごい、テレパシーかな？」

非現実的なことをやっておきながら、非現実的なことを言うスズに——啓二はその頭をくしやりと撫でてやった。